



Data

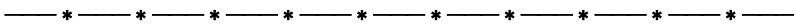
監督：イ・ジュンイク
脚本：ジョ・ジュンフン、キム・ジ
へ
出演：ソル・ギョング／オム・ジウ
オン／イ・レ／キム・ヘスク
／キム・サンホ／ラ・ミラン／キ
ム・ドヨブ

👁️👁️ みどころ

韓国で08年に現実に起きた少女レイプ傷害事件が、なぜ映画のテーマに？導入部で描かれる、少しぎこちないが幸せそうな家族模様を見てみると、事件後の落差の大きさに唖然！

なぜ私の娘だけが？いっそみんな同じ目にあえばいい！そんな思いも当然だが、被害者とその家族はいかなる対応と再生を？

秀作が多い法廷モノに比べると、本作の法廷シーンの出来はイマイチだが、その結末は興味深い。それは、家族の再生？それとも、復讐？さて、あなたは どう見る？



■□■なぜ、こんな悲惨な事件を映画に？■□■

本作は08年に韓国で実際に起きた幼女暴行事件とその裁判結果を基に、『王の男』（05年）のイ・ジュンイク監督が描いた映画。『王の男』は1230万人を動員し、現在でも韓国歴代興行成績ランキング5位（2013年時点）という成績を誇るだけあって、メチャ面白い娯楽作かつ感動作だった（『シネマルーム12』312頁参照）。

しかし、本作が描くのは、工場で働く父ドンフン（ソル・ギョング）と、文房具店を営む母ミヒ（オム・ジウォン）の一人娘である8歳の女の子ソウオン（イ・レ）が、無残にも小学校に登校する途中、学校の近くで酒に酔った男にレイプされたうえ、瀕死の重傷を負わされるという事件。事件発生の急報を受けたドンフンとミヒが病院に駆けつけると、医師からは、「娘さんの命を助けるためには肛門切除の手術が必要。その手術をすれば一生人工肛門の身体になる。しかし、命を助けるためにはそれしかない。是非両親の同意を！」

という非情な宣告が……。それを拒否できるはずのない両親は、やむなくそれを承諾したが、なぜ俺の娘が……。？私の娘が……。？そう聞くだけでも、暗く、悲しい事件だ。イ・ジュンイク監督は、なぜそんな素材を映画に……。？

■□■ぎこちない家族模様に注目！そして、ある雨の朝……。■□■

プロ野球人気の落ちてきた日本では、仕事から帰り、風呂を終え、食卓でビールを飲みながらTVでプロ野球観戦するのが最高の楽しみ、という父親は激減したはず。ところが、韓国にはまだそんな絶滅危惧人種が存在することが、ドンフンを見ているとよくわかる。他方、ドンフンはモノづくりでは優秀な職人らしく、勤務先の工場長（キム・サンホ）からは絶大の信頼を得ているらしい。しかし、家庭の中でのドンフンの立場はぎこちなさが目立ち、娘の髪の毛を結ぶことすらロクにできないから、娘からの信頼はほとんどゼロ。

さらにドンフンの妻ミヒは、自宅で文房具店を営んでいるから、夫婦共に忙しく、夫婦の会話も途切れがちだ。ミヒは現在妊娠5カ月らしいが、それすらドンフンに伝えていないというから驚く。しかも、ミヒの妊娠は3年ぶりに行った、たった一度の性行為によるものらしいから、さらにビックリ。もっとも、その分よくしたもので、娘のソウォンはしっかり者。忙しい両親に、いらざる心配やいらざる世話をかけないように努めていることがよくわかる。本作導入部ではそんなぎこちない家族模様が描かれるのでそれに注目！ところが事件当日は、そんなソウォンの気づかいが裏目に。

ある雨の朝、ソウォンはちょっとした偶然で、工場長の息子で同級生の男の子ヨンソク（キム・ドヨブ）と一緒に登校できなかったばかりに、雨の中を一人で登校することに。しかも、送っていかうかという母親の言葉を断り、母親に言われたとおり、裏通りではなく大回りでも大通りを歩いたが、それが裏目に。ソウォンの前に立った中年男はうさんくさそうだが、雨に濡れながら、「お嬢さん、傘に入れてくれないか？」と言われると、ソウォンはつい……。

■□■身体の傷と心の傷。それに追い打ちをかけたのは？■□■

園子温監督やキム・ギドク監督なら、少女のレイプシーンをかなり露骨にスクリーン上に描き出すはずだが、2013年の青龍映画賞で最優秀作品賞を含む3冠に輝いた本作では、イ・ジュンイク監督はさすがにそこまでは見せていない。しかし、ほとんど死にかけのようなソウォンの状態を見ていると、身体の傷はもちろん心の傷の深さも十分理解できる。

『誰も守ってくれない』（08年）は、殺人犯として逮捕された少年の妹とその両親へのマスコミ攻勢と、それを保護する刑事の仕事を描いた問題作だった（『シネマルーム22』258頁参照）が、昨今多発する凶悪事件へのマスコミの取材ぶりは異常としか言いようがない。さらに、それを連日のようにアホバカ・バラエティー番組で垂れ流し、したり顔

のコメントーターがわかったようなわからないようなことをコメントするのを、多くの国民が楽しんでいる風景も異常としか言いようがない。しかして、韓国人は日本人以上に熱しやすく冷めやすい(?)から、こんな事件が発生し、被害者の父親が病院に血相を変えて飛び込んでくると、たちまち取材陣のカメラはそこに集中。その結果、犯人の名前はわからないものの、被害者の名前や被害の状況はテレビで大々的に報道されたから、ソウォンが受けた身体の傷や心の傷以上に、マスコミの取材攻勢がソウォンに追い打ちをかけることに。

去る8月5日には、朝日新聞が、従軍慰安婦問題についての吉田清治証言を「訂正」する記事を大きく掲載した。しかし、従軍慰安婦問題についての朝日新聞の「罪」は、そんな通り一遍の「訂正」で済むものではないはずだ。それと同じように(?)、こんなバカな取材攻勢をかける韓国のマスコミは、身体も心も傷ついた8歳の少女ソウォンやその両親の「人権」を一体どう考えているの?

■法廷モノとしての出来はイマイチ・・・■

法廷モノ映画の最高傑作は何と言っても『十二人の怒れる男』(57年)だが、『リンカーン弁護士』(11年)、『シネマルーム29』178頁参照)、『それでもボクはやってない』(06年)、『シネマルーム14』74頁参照)、『ゆれる』(06年)、『シネマルーム14』88頁参照)、等々の名作は多い。韓国映画でも、『インディアン・サマー』(01年)、『シネマルーム19』55頁参照)、『ユア・マイ・サンシャイン』(05年)、『シネマルーム11』257頁参照)、『依頼人』

(11年)、『シネマルーム29頁』184頁参照)等々、法廷モノの名作はたくさんある。しかして、本作では、まず事件直後に息も絶え絶えな状態のソウォンが、父親に対して「悪いおじさん」を早く捕まえてもら



© 2013 LOTTE ENTERTAINMENT All Rights Reserved

ためにその特徴を語り始めるが、それを裁判の証拠とするためにはいかなる手続きが・・・？

ソウォンは明確に犯人の顔の特徴を覚えていたから、現場に残された指紋から割り出された約10名の容疑者の中から、犯人を特定できたのはラッキー。現場のすぐ近くに住んでいた犯人の逮捕も容易だったが、犯人は当日、酒をたらふく飲んでいたので、そんな悪いことをしたことは覚えていない、と主張したから、法廷闘争はちょっとややこしそう。私は弁護士として本作にそんな法廷モノとしての面白さを期待したが、それはどうもイマイチ・・・。

本作の法廷モノとしてのハイライトは、あくまで被告人が否認するため、やむなくソウォンが法廷で証人として証言するシーンになる。裁判の進行中に、被害者の父であるドンフンが拘留されている被告人と面接するというのは日本では考えられないが、本作ではそれが描かれる。そこで被告人は、法廷におけるしおらしい様子とはうってかわって、ドンフンに対してその「本性」を見せるから、それに注目！

そんな経験もあったのだから、法廷にソウォンを証人として出廷させること自体がその心を傷つけるだけでなく、ソウォンやその家族に新たな危険を及ぼす可能性があることは明らかだが、さてソウォンは法廷でどのような証言を？そこらあたりに注目しながら、本作の法廷モノとしてのレベルをしっかりと確認したい。

■□■この罪で懲役12年？傍聴席は・・・？■□■

日本では裁判員裁判が始まってから丸5年が経過したが、有罪判決の量刑を巡っては、素人から選出された裁判員と専門家の裁判官の間で大きく感覚が異なるケースがときどき報道されている。本作では、ソウォンが証人として出廷までしたのだから、いくら被告人が否認しても有罪はまちがいないうえ、心神耗弱だと主張しても厳罰はまちがいないし。判決



© 2013 LOTTE ENTERTAINMENT All Rights Reserved

言渡すのではなく、その日の法廷で判決が言渡されるからアレレ・・・？

日本では、まれにそういうやり方もあるが、少女レイプ傷害事件のような重罪ではありえない。また、本作では裁判長は被告人に対して「主文」からではなく、「理由」から言渡したが、それによると被告人の有罪は認められ、厳罰に処すべきだが、被告人は心神耗弱だったと認められるため、「懲役12年」という、傍聴席に座るドンフン、ミヒたちの予想に反するあまりに軽いものだった。前回被告人が証言した時は、傍聴席から工場長が大声で文句を述べ、物を投げつけたのと同じように、この日はその判決に怒りを露わにしたド

ンフンは、退廷しようとする被告人の背後からある物を持って、一気に・・・。

これは、ドンフンが被告人と拘留所で面会した際、自分はきっと軽い罪で社会復帰するから、あまりきついことを言っていると、その仕返しがあるぞ！と言わんばかりの態度を示していたことへの反応だ。しかし、それはともかく、あの事件以降、ソウォンが、そして自分たちがこれだけの苦しみを背負って生きてきたのに、その犯人に対して懲役12年とは一体ナニ？それでは被告人が出所してくる時にソウォンは20歳になったばかりだから、更にいかなる仕返しが・・・？

日本の裁判ではここまで統制のとれていない(?)裁判風景(判決言渡風景)は考えられないが、韓国映画の法廷モノでは、こんな風景もあり？弁護士としてはそんな違和感もあるが、スクリーン上で描かれるドンフンたちの怒りは、十分私たち観客の心にも・・・。
しかして、そのまま進んでいけばドンフン自身が殺人犯になったかもしれない事態を止めたのは・・・？

■□■本作で際立つイ・レの演技に注目！その健気さについて涙■□■

本作では、ドンフンを演じるソル・ギョング、ミヒを演じるオム・ジウォン、そして工場長を演じるキム・サンホがいかにも韓国映画らしく、多少オーバー気味な演技でストーリー展開をリードしていく。また、当初は単に営業のために犯罪被害者の周りをうろついているのかと誤解してしまった(?)、ひまわりセンターの心理療法士のおばさんを演じるキム・ヘスクの静かな迫力と、彼女に隠された過去の告白にも重みと説得力がある。さらに、セリフは少ないものの、工場長とその妻(ラ・ミラン)の子で、ソウォンのケンカ友達(?)である同級生の男の子ヨンソクを演じるキム・ドヨブの演技も立派なものだ。しかし、本作で際立つのは、何と言っても少女事件の被害者とされたソウォンを演じるイ・レの演技力。導入部での、忙しい両親に気遣うちょっとおませな姿はいかにも幸せそうだから、その分だけ逆に、被害にあった後のソウォンの痛々しさは見ていただけでつらくなってくる。

私は全然知らないが、いつの時代でも、どの国でも、子供の好きなもの、子供のヒーローになるものがある。本作では、それがココモンというソーセージのキャラクター。事件後のちょっとした食い違いで父親を拒絶してしまうようになったソウォンと、ココモン(のぬいぐるみ)を通じたドンフンとの交流は、本作特有の温かい味付けになっている。さらに、やっと退院が許され、学校へ通えるようになっても、人工肛門をつけなければならぬソウォンは恥ずかしさで一杯。それをいかに克服し、いかにヨンソクをはじめとする、クラスメイトたちとの「空白」を取り戻していくの？そんなヒロインを見事に演じ切った、イ・レの素晴らしい演技に拍手！

■□■この結末は家族の再生？復讐？あなたの目には？■□■

ひまわりセンター心理療法士のおばさんの言葉を借りるでもなく、性被害にあった少女の「その後」やその両親を含む家族たちの「その後」は大変。法廷の傍聴に通い、被告人への処罰を見守ることも大切だが、ホントはそんなことは一日も早く忘れてしまい、これからをどう生きるかを考えたいところだ。本作でソウォンの母親ミヒは、「なぜ私の子供だけが！」それならいっそ「みんなの子が同じ目にあえばいい」と口走るが、その思いは十分理解できる。たまたま自分の娘がそんな被害にあったのが妊娠5カ月だったこともミヒの大変さをより大きくしたし、父親のドンフンにとっては子供の看病のため仕事に行けないことも大変。下手をすればこのまま家族で一家心中・・・？ そんな思いも一瞬間の片隅をよぎったはずだ。被告人に対する一審判決は懲役12年という不当なもの(?)だったから、ドンフンたちの訴えを背景に、検察官は控訴したはずだが、それは映画としてはどうでもいいもの。イ・ジュンイク監督は、判決言渡し後の本作をどのような形でまとめているのだろうか・・・？



© 2013 LOTTE ENTERTAINMENT All Rights Reserved

本作のチラシには、「幸せに生きていく それが最大の復讐」という文字が躍っている。なるほど、なるほど。他方、本作のパンフレットには、「本来ならタブー視される残酷すぎる事件をテーマにしなが、イ・ジュンイク監督は被害者の耐え難い苦しみに真摯に向き合い、被害者とその家族が絶望の中で見出していく希望を描くことで、これまでの韓国映画が繰り返し描いてきた復讐とは別の復讐を提示した」と書いてある。なるほど、なるほど。この両者に共通する言葉は復讐だが、さて、本作に復讐という言葉はどこまで妥当するの？

自力救済が禁じられた近代刑法では、もし判決言渡の日にドンフンが取ろうとしたあの行動が実行されていれば、ドンフンは殺人者として裁かれていたはず。そうならなかったのは幸いだ、本作がラストに描くような「弟の誕生」によって、ホントにソウォンやソウォンの家族は再生することができるの？映画には描かれないが、あの犯人の刑がホントに懲役12年で確定すれば、実際にはその3分の2くらいの服役で刑務所から出てくるはず。この犯人が性犯罪の常習者であることは一審の審理の中で明らかにされていたから、そうならばこの犯人は、きっとまた・・・？そんなこんなを考えると、本作の結末は家族の再生？それとも復讐？私にはそのどちらにもわかりに納得できないが、さて、あなたの目には？